



## No26 すべての子どもの学びと育ちを保障する特別支援教育

## 第2回 教育講演会の講話より (1)

1月7日、冬休み最後の日にも拘わらず、約200名の小・中学校の先生方、さらに幼稚園・保育園の先生方も市役所の大会議室に集まり、終日、岡山大学の佐藤暁先生と共に「すべての子どもの学びを保障する」ための勉強会を行いました。この紙面だけで佐藤先生のお話の趣旨や内容を分かっていたことはかなり困難ではありますが、勉強会の内容と受講した先生方の感じ取られたこと、プラス、佐藤先生の著書の概要などをNo28までの3回に分けてお伝えしていきたいと思えます。



「そもそも、子どもたちの指導に特效薬を求めることが間違っているのではないでしょうか」・・・なぜ「理解」が必要なのか？・・・子どもの「困り感」を知ることは・・・

わたしたちは、行動面や学習面で何らかの困難さのある子どもたちに、「どうしてこの子は～ができないのだろう」「何が失われているのだろう」と、できない理由や要因を見つけようとしますが、そういった子どもの見方は、すでにできてしまっている大人たちから見下ろした、できあがった形を基準にした子ども理解なのではないのでしょうか。そこから子どもを眺めている限り、困難さをもつ子どもたちがどういった世界を生きているのか実はよく分からないのです。(「困り感に寄り添う支援」より)

まず私たちに必要なのは、困り感に気付く「感性」です。外から見てのことではなく、子どもの側からの、そして子どもがのぞんでいることへの手立てがなければならないのです。

「人間が幸せになれるって、人と人の関係があつてのこと」「問題をもっている子は、人と人とのつながりの中での問題に悩んでいるのです」... 学級集団にうまくなじめない子どもたちも、人(特に担任)との関わりの中で、人を信じる力が育っていくのです。(講話より)

<例えば、多動で、プールを見たらすぐに入ってしまうA君>.....待てるか、待てないかは今後の成長の大きな課題です。先生は、「待てる」指導のために、タイマーの音が鳴って先生が「プールカード」を出したら入っていいことにしました。

<セオリー 今出来ないことを伝えるには、「入ってはいけない」ではなく、いつになったらできるかということ伝えること。 見えないルールは見えるようにすること。>

何回かはパニックになったりひっくり返ったりしますし、タイマー(待ち時間)も初めは30秒でもいいのです。でも、カードが出るまでは必ず待たせます。きちんとルールを教えることがこの子にとって必要です。タイマーの音だけではダメです。人を見なくなってしまう。(音に反応してプールに飛び込んでしまいます。)子どもに本当に見て欲しいのは先生です。先生がプールカードを出してくれたことによって人を信じる力が育ち、人とのきずなが育つのです。(待つ習慣がつかます。)

教師は、何を育てていくか、しっかりと見据えて育てていくことが大切です。

(注)

日によって、あるいは先生によって入らせない時と入らせてしまう時があるというのは、間違った対応です。そうすると、子どもはどうすべきなのか混乱して先生を信用できなくなってしまうのです。



## &lt;受講者の感想&gt;

- ・ 徹底して子どもの視点に立つこと、そして理解の深まりこそがよりよい手立てへの第一歩なのだということを再確認できました。
- ・ 本校にも似たケースの子がおり、関わり方のヒントを得ることが出来た実りある研修だった。その子のための対応をひとつひとつ考えていける教師でありたい。

